シナイ山以前に神の律法は成立していたのでしょうか？

キリストは父なる神の律法を廃止するために来られたのでしょうか？キリストの来訪の主な目的の一つは、「律法を十字架に釘付けにする」事だったのでしょうか？何億の人々が、キリストは神の律法を廃止するために「改革者」として来られたと思い込んでいます。何億の名ばかりの「キリスト教徒達」が、神の律法を「律法主義」「法の堅守」または、「勤めによって救いを得ようとする試み」として、それに従う義務を無視しています。神の律法がシナイ山で成立したのではなく、その何世紀も前の古の父祖達や、異教徒の王達にまで良く知られていたものであると聞けば、皆様は驚愕されることでしょう。

ガーナー・テッド・アームストロング著

教会に通っている多くの信仰深いキリスト教徒達でも、十戒をほんの四つさえ暗唱出来ない者がはたくさんいます！それどころか、彼らは、十戒とは厳しく過酷、且つ堅苦しくて不吉な、それは大変で、順守不可能な「すべき事としてはいけない事」の集まりだといい聞かされ、それは、キリストが取り除きに来た重苦しい束縛だと思うよう洗脳されてきました。

これは真実とは程遠いものです！

十戒の何がそれほど悪いのでしょう？「貴方の父母を敬う」ことが過酷で厳しい束縛なのでしょうか？異教の多神教を拒否し,「あなたは私の他に何者をも神としてはならない」という唯一の真の神を知ることがそれほど大変な重荷なのでしょうか？「あなたは盗んではならない」という戒めに従うことが,悶え苦しみ,歯軋りするようなことでしょうか？殺してはならないという戒めは私達が嫌うようなものでしょうか？

宗教にかかわらず、全ての隣人が十戒を熱心に守ってくれることを、皆さんは大変好ましい事と思うでしょう！彼らがそうする事で、あなたは素晴らしく、良質で、平和で豊かな、法に従った近所で暮らせることでしょう。あなたの四歳の娘が迷子になったとしても、すぐに隣人が安全にその子をあなたの元へ連れてきてくれるような、ドアに鍵をかける必要も、セキュリティアラームやパトカーが巡回する必要も無い、犯罪の無い場所で暮らせるのです。

もし、十のうち一つの戒めだけでも人々が守るならば、社会は今よりもはるかに法に従順なまったく違ったものとなるでしょう。

神の律法が「廃止」されたというのは本当なのでしょうか？もし、今日、あなたが個人的にイエス・キリストに、救われるためになさなければならない事はあるのでしょうかと尋ねたら、彼はなんと言われると思いますか？

難しく考える必要はありません。なぜなら、かつて裕福な青年がイエス・キリストのもとを訪れ、救われるために何をすれば良いか尋ねた時、キリストはこう答えられているからです。「そして、ある者が彼を訪れて言いました。師よ、永遠の命を得るためには、どんな善行をしたら良いのでしょうか？」

「そして、イエスは彼に言われました。なぜ善について私に尋ねるのですか？善とは神唯一人をおいて他におりません。しかし、もし、あなたが生に迎え入れられたいと思うのならば、戒めを守りなさい。」

「青年はどの戒めですか？と尋ねた。イエスは言われた。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。」

「あなたの父母を敬い、あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」

「青年はイエスに言った。その様な事は幼い頃からずっと守ってきました。私にはまだ何が欠けているのですか？」

「イエスは彼に言われた。もしあなたが完全になりたいのなら,あなたの持ち物を売り払って貧しい人に与えて来なさい。そうする事で,あなたは天に宝を積むことになるでしょう。そして,私に付いて来なさい」（マタイによる福音書１９章１６－２１節）

イエスがここでどの戒律に言及されたかは明らかです。イエスが示された点を含む唯一の「戒律」とは、シナイ山で神の指によって石版に成文化された「十戒」です。新約聖書では、十の戒めのうち、第四の戒律を含む神が特に「繰り返された」戒めだけを「主張する」人達がいます。その者達は、キリストが特定の点だけを示したことを、他を除いた、それらの戒めのみを認める行為なのだと主張しています。

それでは、キリストは、他の神を崇拝することを良しとされたのでしょうか？彼は第一の戒律については何も言いませんでした！それは、偶像を崇拝することを良しとされたという事なのでしょうか？第二の戒律についても何も言われておりません！では、安息日を破ることを良しとされたのでしょうか？色欲や欲望に身を任せる事を良しとされたのでしょうか？キリストは十の戒めの「半分」しか諭されていません。でもそれは、十の内キリストが選ばれたものだけが有効で、他は廃止されたという事でしょうか？

キリストは,「あなたの隣人をあなた自身のように愛せ」といわれた際、最後の六つの戒めをこれによって要約されたのです。それは、こうした言葉を含む特定の律法が無いことから明らかです。十の戒めのうち,最初の四つは、神を如何に崇拝するかを説いた神の項目であり、後の六つは隣人を如何に愛するかを説いた人の項目なのです。

十戒

教会に通っている何億の献身的な「キリスト教徒達」が十戒のほんの一部も暗唱できない！という調査結果があります。以下は、出エジプト２０章から直接抜粋した十戒に番号を付けたものです。

（1）「あなたは私の他に何ものをも 神としてはならない」

（2）「あなたはいかなる像も造ってはならない。天上に在るもの、地上に在るもの、そして水中に在るもの、そのどれも模ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。あなたの神たる主は熱情の神なのだから。私を否む者には、その先祖の罪を子孫に三代、四代までも問い質すが、私を愛し、私の戒めを守る者には 、幾千代にも及ぶ慈しみを与える」

（3）「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を「主」は罰せずにはおかれない」

（4）「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の内に

寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海と、そこにある全てのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」

（５）「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる」

（６）「殺してはならない」

（７）「姦淫してはならない」

（８）「盗んではならない」

（９）「隣人に関して偽証してはならない」

（１０）「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」

（出エジプト記２０章３−１７節）

神がその息子をこの地上に使わされて間違いを廃止されなければならないほど、この十戒の内どれがそれほど悪く、不吉で、厳しく、不可能なのでしょう？よく考えてみると、組織化された教会によって「嫌われている」戒めは唯一つです。どの戒めか予想出来ますか？（ヒント：三番目と五番目の戒めの間にあります！）

主流宗派では、殺し、盗み、姦淫、嘘、偶像崇拝（勿論、一つの例外を除いてですが）、両親への罵倒や虐待をしても良いと説くものはありません。しかしどの宗派も、例外なく、「四番目」の戒律は完全に否定しています。

異端派が異教徒の祝日をとりいれて過越祭の神の安息日を「イースター」に置き換え、「ユダヤ」に繋がる全てを拒絶する事に奔走したため、神の聖なる安息日に反して、異教徒の「太陽の日」を代わりに定めたのです！

西暦３２５年のニカイア公会議までに（キリスト昇天から数えて米国の歴史より長い期間）、異端派はキリスト教徒に、ニサン１４日の過越祭や７日目の安息日を守ることで「ユダヤ化」しないよう命じました。

何世紀もの間、信仰深いキリスト教会が、神が唯一聖なる日とされた日に完全に反して「日曜日」を「安息日」として守ってきたのです！

四番目の戒めを再度注意深く読んで下さい。安息日を「心に留め」、これを聖なるものとして「保て」とされています！もとから聖別されていないものを、どうしたら聖なるものとして「保て」ようか！

誰かが冷たい水の入ったコップをあなたに渡して、「これを暖かいまま保っておいて下さい」と言ったらならば、あなたは彼がおかしくなったと思うでしょう。あなたはきっと「暖かくないものをどうやって暖かく保てますか？」と言われるでしょう。

週の７番目の日を心に留めるように、とされている理由は、天地創造の章で明らかにされています。「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった」

「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された」（創世記２章２，３節）神は御自分の「仕事」は完成されましたが、「創造」を終えてはいません！

キリストが言われたことに注目して下さい。「そして、キリストは彼らに言いました。安息日は、人のために創られた。人が安息日のために創られたのではない」

「だから、人の子は安息日の主でもある」（マルコ伝２章２７、２８節）安息日は創られたのです！人が創られたときに安息日も創られ、人への大いなる加護と恵みのために創られました！キリストが安息日の主なのです！では、「主の日」とは本当はどの日でしょうか？それはあなたの聖書にあります！

旧約聖書の神とは誰だったのでしょう？

では 、誰が安息日を創ったのでしょう？誰が十戒を書き記し、モーゼに授けたのでしょう？

「もちろん、神がそうされたのです」とあなたは答えるかもしれません。しかし、聖書の「神」の原型の言葉をご存知でしょうか？それは、エロヒムという「複数形」の言葉であり、ひとつ以上を指すのです！「グループ」や「家族」、「集団」等といった、ひとつ「以上」のものを意味する言葉なのです！

「神は言われた。我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう・・・」（創世記1章２６節）という証拠に注目してください。

神はうわのそらの教授のように独り言を呟いていたわけではありません！エロヒムの一員には聖なる「代弁者」がおり、彼が話していたのです！さらなる証拠があります。「JHVH」もしくは「ヤハウェ」（エホバと発音されることもあります）と呼ばれる方がバベルでの国の分割を話した時の事です。「主（JHVH）は言われた。見なさい。彼らは一つであり、一つの言語を共有している。故に、この様な事をし始めたのだ。こうあっては、彼らが思うがままに行動することを妨げる術は無い」

「地上へ降りましょう。そして、彼らの原語を撹乱し、互いの言葉を理解出来ぬ様にするのです」「主は彼らをそこから地上の隅々に散らされたので、彼らはこの町の建設を後にしました」（創世記１１：６－８）

ここで、聖書で最も驚愕的な章の一つ、ヨハネによる福音書第1章に注目して下さい。それは、400以上ある宗派が、もしそれを真実だと認めたら、彼らの最も大切な教義の多くを完全に破綻させるものです！

その理由は間もなくわかります！

ヨハネは記した。「はじめに「言葉」[ギリシャ語で Logos(ロゴス)、「語る者」という意味]があった。そして、言葉は神[ギリシャ語でTheos（テオス）、一つ以上を意味する。ヘブライ語のエロヒムと同義]と共に在った。言葉は神であった。[ロゴス（言葉）はテオス（神）であった。つまり、この聖なるエロヒムの二人が共に「神」あるいはテオスと呼ばれていたのです]」

「言葉は初め神と共に在った」

「すべてのものは彼によって創られた。創られた物で、彼によらずに創られた物はなかった」（ヨハネによる福音書１章１−３節）これが何を意味するかお気付きになりましたか？聖書は「イエス・キリストが創造をされた」とはっきり語っているのです！アブラハムの子孫である聖母マリアから生まれられ,イエス・キリストとなった方は.「人」の血肉と姿を自らに宿した,父祖達を戒めた「神」自身なのです！「光あれ！」と言われ、「乾いた地よ現れよ！」とも言い,「我々にかたどり、人を創ろう！」と言われた方なのです。彼こそが、安息日を祝福して聖別された方なのです！

あなたに、このページと、同じ事を証す他の多くのページを聖書から破りさる用意が無い限り、あなたは今、ナザレの主イエス・キリストが「宇宙」、すなわち太陽系や全ての生命が暮らすこの地球を創られた、エロヒムの御一人であったという事実に向き合っているのです！

さらに見てください。「この方に命があった；この命は人の光であった」

「そして、光は闇の中に輝き、闇はこれに打ち勝たなかった」

「神から遣わされたヨハネという人が現れた」

「彼は見届けるために来ました。それは光の証人と成ることであり、全ての人が彼を通して信じるためでした」

「彼は光ではなかったが、光の証を立てるために遣わされました」

「その光こそが、この世に生まれる全ての人を照らす真の光だったのです」

「この方は世界におられ、世界はこの方によって創られたが、世界はこの方を知らなかった」

「この方はご自分の国に来られたが、ご自分の民はこの方を受け入れなかった」（ヨハネによる福音書１章４−１１節）「誰」が「世界におられた」のでしょう？キリス

トです！「誰」が世界を創られたのでしょう？キリストです！「誰」がご自分の国に来られ、ユダヤ人が、「この方を受け入れなかった」のでしょう？キリストです！

次の一節を見てください。「しかし，この方を受け入れた人々，すなわち，その名を信じた人々には，神の子共となる特権をお与えになった」（ヨハネによる福音書１章１２節）これは、ビリー・グラハム博士のお気に入りの一節で、多くの福音主義のキャンペーンで引用されて人々に「キリストを受け入れる」ことを勧めておられます。これらの驚くべき事実を聖書で読まれてもなお、新約聖書でのイエス・キリストが旧約聖書の神その方であることが正直に「理解」出来ない者がおりましょうか？創造主であったと言う事は即ち、十戒を書き記してモーゼに授けられた、「律法の制定者」でもあったと言う事です！

ヨハネは続けます。「この人々は，血によってではなく，体の欲求や人の意欲によってでもなく，ただ，神によって生まれた[ギリシャ語でgennao(ゲンナオ)、「生じる」という意味]」

「言葉は人となって，私達の間に住まわれた[ギリシャ語でtabernacled(タバナクル)、仮に住まうという意味]、（私達はこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である）、この方は恩恵と真実に満ちておられた」（ヨハネによる福音書１章１３、１４節）

ご自身の指で十戒を記された方がキリストとなられた神と「同じ方」であるということがおわかりになったでしょうから、次の強力な裏づけに注目してください。「それゆえ主[ヘブライ語でJHVH、あるいはエホバ、イスラエルの民と約束を交わされたエロヒムのお一人で、キリストとなられた方！]である私はあなた達の神であり、決して変わらない。それゆえヤコブの子らは滅ぼされない」（マリキ書３；６）それでは、神は変わられるのか、それとも変わられないのでしょうか？

父祖や預言者達の神、即ちキリストになられた方、が「変わらない」と言われるなら、それでもあなたは神が変わられると思いますか？

愚かな、冒涜者のみが「そうだ」と言うでしょう！

もし神が「変わられない」なら、神として十戒を記された後に、イエス・キリストとしてそれを「変更」しに地上に降りてこられると思いますか？

パウロは書きました、「イエス・キリストは、昨日も今日も、また永遠に変わることのない方です」（ヘブライ人への手紙１３章８節）

決して変わられないからこそ、イエス・キリストは裕福な青年に言われました。「もしあなたが生に迎え入れられたいのなら、掟を守りなさい！」

神の律法が最初に成立したのはいつでしょうか？

神が、ご自身が創造されたものに、ご自身が神という「支配者」であると最初に告げられたのはいつでしょうか？人に戒めを授けられたのはいつなのでしょう？

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」

「主なる神は人に命じて言われた。園の全ての木から自由に取って食べてよい」

「ただし,善悪の知識の木からは,決して食べてはならない。たぜなら,食べると必ず死んでしまうからだ」（創世記２：１５−１７）「創造主」であるが故に,神[エロヒム,つまり「言葉」でありキリストとなった神の御一人]は,人に「命じられた」のです！神は,みずみずしく,美しい,熟した,おいしい,身体に良い,多くの食べ物を人に「自由に食べなさい」と言われることで,ご自身があらゆる贈り物の贈り主であることを明かされたのです。ナツメヤシやココナッツの実をつけた様々なヤシの木,桃,梨,りんご,プラム、さくらんぼなどの果物、くるみ、ハシバミ、ピスタチオ、アーモンド、さらには、オリーブや多くの種類の実をつけた多様な木々が簡単に手の届く範囲にあったのは明らかです。葉が生い茂った緑豊かな潅木やぶどうから根菜類までが手に入ったのです。

アダムはこれらのもの全てを自由に食べることが出来たのです！

しかし、神は広大な（大国と同じくらいの大きさだったでしょう）園の中央にある「一つ」の木だけは、人に触ってはならないと命じられました！

その木に触ることは、「死」という罰をもたらしたのです！

そして、イヴが創られた後、世界で最初の嘘つきであるサタンが来ました。サタンは創世記で「囁き魅惑する者」とされています。「蛇」という言葉はヘブライ語のNachash(ナハシュ)という、形状ではなく、性質を現す言葉に由来します。たとえサタンが聖書で「蛇」に例えられていても、それは「囁き魅惑する者」を意味し、決して「蛇」ではありません。

何が起こったか注目して下さい。「主なる神が造られた野の生き物の中で、最も巧妙なのは蛇[Nachash(ナハシュ)]であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか？」

「女は蛇に答えた。「私達は園の木の果実を食べてもよいのです」

「でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べるどころか触れてもいけない、死んではいけないから、と神様は仰いました」

「蛇は女に言った。 決して死ぬことはない」

「それを食べると、目が開け、神々の様に善悪を知る者と成る事を神はご存じなのだ」

「こうして女が、その木は食することが出来、魅力的で、人を賢くする望ましい物だと理解した時、彼女はその実を取って食てしまい、一緒にいた夫にも手渡し、彼も食べてしまいました」（創世記３章１－６節）

Nachash(ナハシュ)は、「巧妙」でした。彼は率直に神を嘘つきと非難したりはしませんでした。代わりに、彼はその問いを誤解を招く言葉で表したのです。彼は神が最初の二人の人間に、彼らが「飢えて」死ぬべきだと仰ったと「暗示」したのです！彼は神が食欲をそそる魅力的な食べものを彼らが食べることはできないと仰ったと暗示したのです！神が、彼らをこんなにもたくさんの食べ物の真ん中に置かれながら、飢え死にしようが触れてはいけないと仰ったと暗示することで、神は残酷であると巧みにほのめかしたのです！

世界で最初の疑うことを知らない主婦はこの悪徳セールスマンの弁舌を聞きました。彼女は「説明」しなければと思い、こう言いました、「そんな事はありません。あなたは誤解しています。神は園の中央の木の果実以外は何でも食べても良いと言われました。もし私達がそれを食べれば死ぬだろうと！」

サタンに「説明する」という行為は、彼の罠に落ちる事を意味しました。

そしてサタンは最初の「嘘」をついたのです。それはキリスト教世界にサタンが偽りを用いて押し付けた「大きな嘘」なのです。それは次のように言ったも同然でした。「まさか、死ぬことなどありません、あなた達が神のように永遠に生きることが出来るのを知らないのですか？神があなた達に食べさせたくないその果実は、あなたを神のように賢明にできる「知恵の実」なのです。あなた達が死ぬようなことは無いと神は「ご存知」なのですから！」

スペイン語の聖書では、この表現は次のようになります。Mas sabe Dios(マス サベディオス)、「神はさらに知っておられる」あるいは「神はもっとよく知っておられる」という意味です。

サタンは、その最初の嘘を何千年も持続させました。現在でも、「何億の人々」が、天国か地獄で「永遠に生きる」「不死の魂」持っていると思い、自分達は死なないと信じています！

しかし,アダムとイヴは「罪」を犯しました！どうやってでしょう？禁断の実によって彼らと神の間柄を遠ざけた事により,彼らは最初の戒めを破りました。唯一の親を侮辱し背く事で五番目の戒めを破りました。彼らの物ではない物を盗むことで八番目の戒めを破りました。禁断の実を渇望し,欲する事で十番目の戒めを破りました。

ヤコブは書きました。「律法全体を守ったとしても、その一点でも破れば、全ての点において有罪となるからです」（ヤコブの手紙２章１０節）

最初の罪の代価に注目してください。「神は女に向かって言われた。お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は夫を求め彼はお前を支配するだろう」

「神はアダムに向かって言われた。お前は妻の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。お前のせいで、地は呪われたものとなった。お前は生涯そこから食べ物を得ようと苦しむだろう」

「それはお前に対して茨とあざみを生えいでさせ、お前はそこから野草を食することとなるだろう」

「お前は土に還るその日まで,食べ物を得るためにその顔を汗にまみれるだろう。お前は土から取り出されたので,お前は塵であり,塵に返るのだ」（創世記３章１６−１９節）

そして神は彼らをエデンから追放されました。「こうして、神は彼をエデンの園から追い出し、彼に、自らが取り出された土を耕させることにされた」

「こうして人間を追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、全方角を照らす燃ゆる剣を置かれた」（創世記３章２３、２４節）

その刑罰は生涯のつらい労働でした！簡単に手に入るみずみずしい果物の代わりに、人は茨とあざみと格闘しなければなりませんでした。生き残るための作物を育てるために、汗が額から滴り落ちるほど働くこととなりました。アダムとイヴは、さざなみがたつ小川や快適な気候、手を伸ばせば届くあらゆる食べ物のある彼らの美しい家を失いました。彼らは純真さを失いました。以前は美しいとだけ思っていた裸であることが今や恥ずかしく、きまりの悪いことに思えました。彼らは罪の意識を感じ、神から身を隠したのです！

彼らは自分達の長男が、嫉妬にかられて自分の弟に手荒く反抗して殺してしまうという、最初の殺人を犯すのを目にしました。彼らの人生は、悲惨な出来事がおこり、ひどい記憶に苛まれ、大変な仕事をして、そして最後に死を迎えるという惨めなものだったでしょう。

これは一体誰の責任なのでしょう？なんらかの律法があったのでしょうか？守るべき戒めがあったのでしょうか？

もちろんありました！この話の核心は、最初の男女の「最初の罪」を記す、すなわち「原罪」を明らかにすることです。

神がソドムとゴモラの住民について言われたことに注目してください。「しかし、ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた」（創世記１３章１３節）罪とは何でしょう？創世記１３章１３節の神と「同じ」神である方は、ヨハネにも次のように書かせました。「罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです」（ヨハネの手紙１、３章４節）

パウロは書きました。「律法こそが怒りを執行するものであり、律法のないところには違犯もありません」（ローマの使途への手紙４章１５節）ソドムの住民が罪深き者となるには、「律法」が存在していなければならなかったのです！聖書はそう語っています！

アブラハムは神の十戒を守りました

アブラハムは「信仰の父」と呼ばれています。彼の神への完全なる信頼と、神は約束を守ると信じたその信仰が、アブラハムを全人類の永遠の模範とならしめたのです。パウロは書きました。「彼は不信に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ強い信仰をもって神を賛美しました」

「神は約束したことを実現させる力をお持ちだと確信していたのです」

「これによって、彼は正義として認められたのです」（ローマの使途への手紙４章２０−２２節）

この、神が約束したことは何であれ、実現させる力をお持ちだと信じる事こそが、信仰という言葉の最良な定義の一つと言えるでしょう。

恩恵と勤めを混同しないでください！恩恵とは労せず得た、身に余る許しです！功なくして得た恩赦です！一方、勤めとは「必須」のものであり、なにかを「得る」為のものではありません！

あなたは,自分の国で生まれましたか？それならば,市民権を「得る」のに何もせずと,無償の贈り物として与えられたでしょう！あなたは自由と市民権を保持するために「自国の法律に従う」必要がありますか？当然そうでしょう！神の御国や救いについても同じ事なのです。神の「無償の贈り物」は,私達の罪への慈悲深い「許し」なのです！では,罪とは何でしょう？罪とは,法に背くこと,つまり「十戒を破る」ことです！

仮にあなたが車泥棒や銀行強盗に関する法律を破ったとしましょう。あなたは罪を悔い、それを恥じ、警察に自首しお金を返します。

そこで慈悲深い裁判官があなたに「恩恵」を与えたとします。あなたの心からの悔恨の情を考慮して「執行猶予」を与えてあなたを釈放したとします。

これは、あなたが好きな様に「再び法を破ってよい」事に成りますか？それとも、あなたが「法を守って暮らす」事を求められているのでしょうか？あなたが再び法を守って暮らし始めたとして、それは与えられた慈悲深い許しを「獲得」した事に成るのでしょうか？もちろん違います！

十戒を破った私達を神が許される時、神は私達に「戒めを守って」暮らすことを望まれているのです。

神はアブラハムを極限まで試されました。それは、普通の人間の疑いと恐れの極限をはるかに超えるものでした。アブラハムが、自分の息子イサクを神に捧げるかどうかという試練に合格すると、神（キリストとなった方）は言われました。「私は自らに誓おう、と主は言われる。あなたがこれを行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので」

「あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星や海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を支配する事と成ろう」

「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得るだろう。あなたが私の声に聞き従ったからである」（創世記２２章１１６−１８節）

神（キリストとなった方）がイサクに言われたことに注目して下さい。「あなたがこの土地に寄留するならば,私はあなたと共に在ってあなたを祝福し,これらの土地を全てあなたとその子孫に与え,あなたの父アブラハムと交わした私の誓いを成就しよう」

「さらに、私はあなたの子孫を天の星のように増やし、これらの土地を全てあなたの子孫に与えよう。そして地上の諸国民は全て、あなたの子孫によって祝福を得よう」

「アブラハムが私の声に聞き従い、私の戒めや命令、掟や教えを守ったからである」（創世記２６章３−５節）これは、シナイで律法が成文化される「何世紀」も前のことなのです！「ユダヤ人」と呼ばれる者が生まれる二世代も前のことなのです！モーゼより何世紀も前の出来事なのです！

十戒はモーゼの時代に「作り出された」のではありません。それらは何世紀にも渡って人類に「認知」されており、その力を完全に発揮してきたのです。

アビメレクはどうして「大罪」を犯さずにすんだのでしょう？

アブラハムの妻サライ（サラ）はとても美しい人でした。白い肌におそらく金髪で、アブラハムがいた土地の浅黒い肌の部族の中では珍しかったでしょう。地元の王がサラを自分のハーレムに求めた時の出来事に注目して下さい。「アブラハムは、そこから南の地方へ移り、カデシュとシュルの間に住み、ゲラルに滞在していた」

「アブラハムは妻サラのことを、「これは私の妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは使いをやってサラを連れ去りました」

「その夜、夢の中でアビメレクに神が現れて言われました。「あなたは、召し入れた女のゆえに死ぬ。その女は夫のある身だ」

「しかし、アビメレクはまだ彼女に近づいていなかったので、こう言いました。「主よ、あなたは正しい者でも殺されるのですか？」（アビメレクは罪の報いが「死」であると知っていました）

「彼は私に彼女は 妹 だと言いませんでしたか？また彼女自身さえ、『あの人は私の兄です 』と言いました。私の行いは正当な信念と罪無き手によるものです」

「神は夢の中でアビメレクに言われた。「私も、あなたが正当な信念に基づいてこれをしたことは知っている。だから私も、あなたが私に対して罪を犯すことのないように、彼女に触れさせなかったのだ」

「直ちにあの人に妻を返しなさい。彼は預言者だから、あなたのために祈り、命を救ってくれるだろう。しかし、もし返さなければ、あなたやその家来も皆必ず死ぬと覚えておきなさい」

「次の朝早く、アビメレクは家来達を残らず呼び集め、一切の出来事を語り聞かせた。一同は大変恐れました」

「アビメレクはそれから、アブラハムを呼んで言った。「あなたは我々に何ということをしたのか。私のいったい何があなたを害し、あなたは私と私の王国に大罪を犯させようとしたのか。あなたは、してはならぬことを私にしたのだ」

「アビメレクは更にアブラハムに言った。「どういうつもりで,こんなことをしたのか」

「アブラハムは答えた。「この土地には、神への畏怖が無く、私は妻のために殺されると思ったのです」

「それに実際、彼女は私の 妹 でもあるのです。私の父の 娘 ですが、母の 娘 ではないのです。それで、私の妻となったのです」

「そして、神が私を父の家から離して、さすらいの旅に出された時、私は妻に頼んだのです。『私の為と思って、どこへ行っても、私のことを、この人は兄ですと言ってくれないか』と」

「アビメレクは羊、牛、男女の奴隷などを用いてアブラハムに与え、また、妻サラを返しました」（創世記２０章１−１４節）

アビメレクは姦通に対する戒めを知っていました。もし戒めを破れば死という罰を被ることを知っていました。サラをアブラハムの元に留め、イサクの誕生という偉大な奇跡とその子孫を残すために、神エロヒムの「代弁者」であるキリストとなった方は、夢でアビメレクにサラの真実を明かされたのです。

次に、シナイで律法が成文化される前にどのように神が安息日を人に守らせたのかを見てみましょう。

神はイスラエルの民が神の戒めを守るかをどのように試されたのか

人々が、エジプトで奴隷だった頃を思い出して肉を切望し、食べ物について不平不満を言い始めると、神は、四番目の戒めである、安息日に関して彼らを試されました。「主はモーゼに言われた。「見よ、私はあなた達のために、天から食べ物を降らせよう。民は出て行って、毎日必要な分だけ集めなさい。私は、彼らが私の指示どおりにするかどうかを試す」

「ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっているだろう」（出エジプト記１６章４、５節）

そして神は天から「マナ」を降らせるという奇跡を起こされました。「六日目になると、彼らは二倍の量、一人当たり２オメルの食べ物を集めた。共同体の代表者は皆でモーゼのもとに来て、そのことを報告した」

「モーゼは彼らに言った。「これは、主が仰せられたことである。明日は休息の日、主の聖なる安息日である。焼くものは焼き、煮るものは煮て、余った分は明日の朝まで蓄えておきなさい」

「彼らはモーゼの命じたとおり、それを朝まで残しておいたが、臭いを放つどころか虫も付かなかった」

「モーゼは言った。「今日はそれを食べなさい。今日は主の安息日である。今日は何も野に見つからないであろう」

「あなた達は六日間は集めてよいが、七日目は安息日だから野には何もないであろう」

「七日目になって、民のうちの何人かが集めに出て行ったが、何も見つからなかった」

「主はモーゼに言われた。「貴方達はいつまで私の戒めと教えを拒み,守らないのか」

「見なさい。主はあなた達に安息日を与えたのです。だからこそ、六日目に主は、あなた達に二日分の食べ物を下さるのです。七日目にはそれぞれ自分の所に留まり、その場所から出てはなりません」

「民はこうして、七日目に休みました」（出エジプト記１６章２２−３０節）これは聖書の出エジプト記第２０章の「４章も前」に記されており、第２０章はキリストとなった方の指で石版に成文化された律法の授与を語った章です！

モーゼが石版を受け取るために山へ登る直前に、神はご自身とイスラエルの民の間に契約と合意を提案されたのです。

「モーゼが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。「ヤコブの家にこのように語りイスラエルの人々に告げなさい」

「あなた達は私がエジプト人にしたことを見たし、あなた達を私が鷲の翼に乗せて私のもとに連れて来たことも知っています」［注：これは隠喩です。「鷲の翼」とは神のご加護を意味し、彼らは徒歩あるいは動物に乗って来ました。ヨハネの黙示録１２章１４節を参照して下さい］

「ですから今、もし私の声に聞き従い私の契約を守るならば、世界が全て私のものであるが故に」あなた達は全ての民の間において特別な宝となるだろう。

「そして、あなた達は、私にとって祭司の王国、つまり、聖なる国民となるだろう。これが、あなたがイスラエルの人々に伝えるべき言葉である」

「モーゼは戻って、民の長老達を呼び集め、主が命じられた言葉をすべて彼らの前で語りました」

「そして、民は皆一斉に答えました。「私 達は、主が語られた事を全て行 います」と」（出エジプト記１９ 章 3−8節）

人々は神に従 うことに同意したのです！契約とは、何かに「関する」二者間の「合意」である事を思い出してください。神からの提案は婚姻契約と似た様なものです。神は言われました。「見よ。その日が来る。その日私は、イスラエルとユダの両家と新 しい契約を結ぶ、と主は言われた」

「その契約は、 私 が彼らの先祖の手をとって、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ様なものではない。 私 は彼らの主であったのに、彼らは私 の契約を破ってしまった、と主は言われた」（エレミヤ書３１ 章 ３１、３２節）

契約を破ったのは誰でしたか？彼らです！旅回りのセールスマンと駆け落ちしてしまう主婦の 話 のように、イスラエルは周囲の異教徒の国々という「愛人」の後を追ってしまいました。神がイスラエルの民に言われたことを若い求婚者に例えるなら、次の様になるでしょう。「 私 と結婚し、 私 に忠 実な妻となってくれれば、 私 はあなたを愛し、守るでしょう。 私 は必要に応じて雨を降らせ、豊作と健康、長 寿、 幸 せな結婚生活、そして、素直で 幸 せな子供達を与えましょう。敵から守り、わずか１０パーセントの「一律課税」だけを課し、徴 兵もなく、エジプトにいた頃のような風土病にもかからないようにしましょう。 私 はあなたを地上で 最 も栄える国民にしましょう」これについては、服 従に対する恵みと不服従に対する呪いが全て列記されているレビ記第２６ 章 をお読み下さい。

神は新たな契約を提案されました！「それらの日の後,私 がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである,と主は言われる。 私 は私 の律法を彼らの中に置き,彼らの 心 にこれを書きしるす。 私 は彼らの神となり,彼らは私 の民となる」（エレミヤ書３１ 章 ３３節）
神が「新たな」契約を「教 会」と結ぶと言われたという部分はあるでしょうか？

同じ言葉がヘブライ人への手紙でもほぼ一字一句同様に繰り返されていることに注 目して下さい。「しかし、今、彼[キリスト]は、それよりはるかに優れた務めを得ておられます。更にまさった約束に基づいて制定された、更にまさった契約の仲介者になられたからです」

「もし、あの最初の契約が誤りの無いものであったなら、第二の契約の余地はなかったでしょう」

「事実,神はイスラエルの人々を非難して（契約自体に「誤り」や欠陥はありませんでした。誤りは反抗的な人々にあったのです！）次のように言われています。『見よ、私がイスラエルの家,またユダの家と,新しい契約を結ぶ時が来る』と,主は言われる」

「それは、私が彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らは私の契約に忠実でなかったので、私も彼らを顧みなかったと、主は言われる」

「それらの日の後、私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれであると、主は言われる。私は私の律法を彼らの心中に置き、彼らの胸の内にそれを書きしるす。私は彼らの神となり、彼らは私の民となる」（ヘブライ人への手紙８章６−１０節）

神の十戒があなたの心と胸中に深く刻まれれば、後天的な性質のようにあなたの「一部」となるでしょう！あなたは自らの心と胸中にあるものは当然理解しているわけであり、あなたの精神はそうした知識と直接結びついているはずです。「新たな契約の教会」を信仰すると主張する人々の「胸と心」の中には、十戒の全てがあるのでしょうか？彼らは十戒を暗唱できるのでしょうか？彼らは十戒を信じているのでしょうか？罪を犯したり、うまくいかない場合に神の許しを懇願し、聖霊の助けによって精一杯十戒に「服従」しているのでしょうか？

古い契約は物理的な生涯についてのものでした。先に列挙されたような物理的,物質的な約束を含んでいました。しかし,新たな契約は「永遠の命」という霊的な約束です！それは古い契約と同様に,神と神が呼びかける者達との間の「合意」なのです。

神は提案されます。「律法を破ったことを悔い改め、古い罪深き自分自身の死と埋葬の象徴として洗礼を受け、キリストの名のもとに「新たな」命として復活するならば、私の十戒に背いたあなたの全ての罪を許し、私は私の律法をあなたの精神の深み、つまり心と胸中のもっとも深き場所に置き、あなたを私の国へいざなおう」

ペトロは言いました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、贈り物として聖霊を受け賜ることでしょう」（使徒言行録２章３８節）

何を悔い改めるのかって？「罪」を悔い改めるのです！では、罪とは何でしょう？「罪とは法に背くことです！」なら、法とは何でしょう？ 十戒です！

律法には「誤り」はありませんでした。誤りは、律法を「破った人々」にあったのです。「しません」と約束したことは法を破ることであり、人々は法を守ると約束したのです。「約束」,それは契約をなりたたせる「同意」です！「愛し、敬い、『従います』」という言葉を含んでいた結婚の誓約のように、イスラエルの民は神に同意しました。神が列挙された全ての「恵み」を人々に与えられるなら、人々は素晴らしいものとして彼らに与えられた神の律法を守り、彼らの神に忠実であるでしょう！

私達がここで何度も言及している神は、イエス・キリストになられた、「決して変わらない」方のことであるのを忘れないでください！

モーゼが律法について言ったことに注目して下さい。「見よ、私が私の神、主から命じられたとおり、あなた達に掟と法を教えたのは、あなた達がこれから手に入れる土地でそれを行うためである」

「あなた達はそれを忠実に守りなさい。そうすれば、諸国の民にあなた達の知恵と良識が示され、彼らが全ての掟を聞くとき、「この大いなる国民は確かに知恵があり、賢明な民である」と言うであろう」

「いかなる呼び求めに対しても、我らと共に居て下さる我らが神、主のような神を持つ大いなる国が他にどこにあろうか」

「また、私が今日あなた達に掲示した全ての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国が他にどこにあろうか」

「でも気を付けるのです。あなたがその目で見たことを忘れないように、それがあなたの心から消え去るようなことが生涯無いように、ひたすらその魂を大切にし、あなたの子供や子孫達にも語り伝えるのです」（申命記４章５−９節）

キリスト教徒の多くは、「なぜ」律法が厳しく、同意しがたい、重荷なものであり、キリストが「廃止」するために来られた「すべき事としてはいけない事」の厄介な羅列だとずっと教えられてきたのでしょうか？

キリストは、燃える柴の中からモーゼに話しかけたのは「ご自身」だと言われました。キリストはそれをご自分を迫害するパリサイ人に言われ ,そのためにパリサイ人は、自らを神であると主張したという理由でキリストを「殺そう」としました。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から,私はある。すると,ユダヤ人達は,石を拾い上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から彼らの合間をすり抜けて出て行かれた」（ヨハネによる福音書８章５８、５９節）

世界のキリスト教教会がキリストに関するこのたった「一つ」の真実さえ知っていれば、十戒が「廃止」された事など「決してなかった」事が「わかる」でしょう！

神（エロヒム「私」）が法を繰り返された後、モーゼに言われたことに注目して下さい。「どうか、彼らが生きている限り私を畏れ、私の戒めをことごとく守るその心を持ち続け、彼らやその子孫が常しえに幸せになれるように！」

「あなたは、彼らのもとに行って、それぞれの天幕に帰れと命じなさい」

「しかし、あなたはここに留まり、私と共にいなさい。私は、あなたに戒めと掟と法をすべて語り聞かせよう。あなたはそれを彼らに教え、彼らは私が与える土地においてそれを行うのだ」

「あなた達は、あなた達の神、主が命じられたことを忠実に行い、右にも左にもそれてはならない」

「あなた達の神、主が命じられた道をひたすら歩みなさい。そうすれば、あなた達は命と幸福を得、あなた達が手にする土地で長く生きることができるでしょう」（申命記５章２９-３３節）

続けて、神は人々が、神の正しい法を守るならば与えられる「大いなる恵み」を強調されました。

神の十戒は、シナイで、石版に記され「成文化」されただけなのす！しかし、それらは古代の人々に「熟知」され、父祖達によっても認知されていました！神の律法はシナイよりはるか以前から成立し効力を持っていたのです！それは神の御国でも成立して効力を持つでしょう！

「終わりの日に、主の神殿の山は、他の山々の上に君臨し、どの峰よりも高くそびえよう。国々はこぞって大河のようにそこに向かうだろう」

「そして、多くの民が来て言うでしょう。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。されば、主は私達に道を示され、私達はその道を歩もう」と。主の法はシオンから出で、御言葉はエルサレムから出る」

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、戦を知る事はもう無いだろう」（イザヤ書２章２−４節）

キリストは「王の中の王」「主の中の主」であり、彼が鉄の杖でこの世界を千年間治めるだろうと預言されています。「勝利を治め、私の勤めを最後まで守る者には、諸国の民の上に立つ権威を授けよう」

「そして、彼は鉄の杖をもって彼らを治め、彼らはまるで土器の様に打ち砕かれよう。私も父からその権威を受けたのだから」（ヨハネの黙示録２章２６節）

間違わないで下さい！神は、神が治めることが出来ない者は誰も救いません。

聖書の終わり近くで、神の教会は、「戒めを守る教会」として記述されています。「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残り全て、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守る者達と戦争を起こしに行った」（ヨハネの黙示録１２章１７節）

あなたはどうでしょう？あなたは罪が何かを理解される者でしょうか？私達が罪を悔い改め、神が私達を許される時、神は「さあ、もう罪を犯してはなりません」と私達に求めているという事がお分かりですか？あなたは「神の十戒を守る」教会の一員でしょうか？

聖書の最終章に注目して下さい。「神の戒めを守る者達は祝福されている。彼らは命の木への権利を与えられ、門を通って都に入っても良いのだ」（ヨハネの黙示録２２章１４節）

神LOGOS（ロゴス）、またはエロヒムの代弁者、そしてまたはイエス・キリストとなられた方であり、燃える柴の中からモーゼに話をされたその方は、ご自身を「私」と称され、「私は変わらない」と言われました！その方は、律法を「変更」したり、「廃止」するために来られたのではなく、律法という文を霊的な水準へ「高める」ために来られたのです！

どちらの戒めがより制約的でしょうか？「殺してはならない」でしょうか、それとも「あなたの兄弟を心から憎むことは殺すに等しいことだ」というものでしょうか？

キリストは、律法を「高め」、制約的なものとされたのです！

救世主、イエス・キリストは言われています。「私が父の掟を守り、その愛に留まっているように、あなたがたも、私の掟を守るなら、私の愛に留まることでしょう」（ヨハネによる福音書１５章１０節）

— 終 —

この資料は、内容を改ざんせず、著者と出版社を明確にした上でなら、コピーして友人や家族に無料で配布する事が出来ます。一般大衆向けに出版する事は出来ません。

この出版物は個人的な探求の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の言葉をそのまま受け入れるのは賢明ではないという事を理解し、全ての事柄に関して、あなたはご自分で聖書に基づいて証を立てるようにして下さい。

ガーナーテッドアームストロング福音協会
私書箱　７４７Flint、テキサス　７５７６２
電話番号：（９０３）５６１-７０７０　　Fax:（９０３）５６１-４１４１

なお当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

www.garnertedarmstrong.org/

ガーナーテッドアームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く、協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。